

第1部 映画祭

第15回日本市民安全学会 秩父大会
市民安全・安心フォーラム2017 in ちちぶ
秩父市セーフコミュニティ国際認証2周年記念

2017年11月25日(土)

市民安全啓発映画祭(映画の集い)

— 秩父宮記念市民会館 開館記念 特別企画 — 会場: 秩父宮記念市民会館 大ホール

10:00~ 記念上映『パパは風になった』 & 監督記念講演



主 演: 小林綾子
制作統括・監督: 高木裕己
挿 入 歌: 新井満『千の風になって』

文部科学省選定 / 一般財団法人 埼玉県交通安全協会 推薦

交通安全教育映画

『パパは風になった』(約30分)



秩父礼所を舞台にした、小林綾子主演の感動の映画!

一人の人間の瞬間の不注意が招いた悲劇…
夫の供養のために、妻と子が行う巡礼の旅
秋の山々の美しい風景と
挿入歌『千の風になって』の
メロディーが
重なっていく…

10:30~
特別記念講演
(約20分)

映像の中で安心安全をどう描くか

映画監督 高木裕己氏

(株)映学社代表取締役。防火、防災、交通、人権など、命に関わるテーマを取り上げた作品の実績は多く、文部科学大臣賞(6作品)のほか、スペイン、ハンブルク(ドイツ)、ジャカルタ(インドネシア)、ロサンゼルス(アメリカ)などの国際映画祭で金賞、銀賞、特別審査員賞などを多数受賞している。

11:00~12:00 特別上映「映画しか伝えられない『公助・共助・自助』の今」

社会教育映画

解説: 山下弘忠氏(元警視庁鑑識課管理官/学会会員)

『事故や事件から 人を守る 町を守る 警察しよのはたらき』(約18分)

子供に向けて、警察署や地域の団体がやっている、暮らしを守るための活動の今を、詳しく紹介します。

監修: 石附弘(日本市民安全学会会長)

文部科学省選定 / 2017年教育映像祭優秀作品賞受賞



社会教育映画

解説: 小澤光男氏(関東学院大学法学部非常勤講師/学会会員)

『火災から 人を守る 町を守る 消防しよのはたらき』(約20分)

火災から人々の暮らしを守るために行っている、消防署や地域の団体の活動の今を、わかりやすく紹介します。

監修: 小澤光男(前横須賀市北消防署副署長)

文部科学省選定



社会教育映画

解説: 村瀬恵子氏(葛西昌医会病院医療支援課地域連携課長/学会会員)

『防げるか? 認知症 注目される食の力』(約18分)

認知症予防に注目されている、食の力。食の役割や、調理・食事介助の仕方を、最新の知見をまじえながら、具体的に紹介します。

監修: 中村育子(医療法人社団福寿会福岡クリニック管理栄養士/日本在宅栄養管理学会副理事長)



主催: 秩父市セーフコミュニティ推進協議会、秩父市、日本市民安全学会、映学社

第2部 記念鼎談

秩父市セーフコミュニティ認証2周年記念事業

「セーフコミュニティで『つながる』『はぐくむ』『とどける』安全・安心のかたち」

企 画 趣 旨

本鼎談は、秩父市のセーフコミュニティ（SC）国際認証2周年および秩父市民待望の芸術文化創造拠点「秩父宮記念市民会館」の開館を記念し、秩父市および秩父市民が、新市民会館の「つながる」「はぐくむ」「とどける」という3つのコンセプトを安全文化創造の基本として、将来にわたり市民の安全・安心の実現のため世界基準の安全・安心なまちづくりを発展させていくことを誓い、市民の方々と共にその「意義を考える場」として企画されました。少しでもご参考になれば幸いです。

ご出演の方々

久喜 邦康氏

秩父市長

白石 陽子氏

一般社団法人 日本セーフコミュニティ推進機構代表理事

石附 弘氏（モデレーター）

日本市民安全学会会長

「秩父宮記念市民会館」



つながる

誰もが集い、交流が生まれる文化を通じて、世代を超えてつながる

はぐくむ

次世代を担う人材を育てる新たな文化芸術を創り出す

とどける

地域ならではの文化資源を引き継ぐ秩父の新しい文化を発信する

秩父市セーフコミュニティとこれからの安全・安心なまちづくり



秩父市長 久喜 邦康

市民安全・安心フォーラム大会長
セーフコミュニティ推進協議会会

1. 安全・安心なまちづくりとセーフコミュニティの役割について

まちづくりの視点からみると、秩父市は従来から地域の活動が非常に活発に行われており、町会をはじめ消防団や交通安全協会など様々な団体が、安全・安心に関する取り組みを行っていました。しかし、全国どの自治体でも安全なまちづくりのために日々取り組んでいるにも関わらず、事故やケガは様々な事象から発生しており、よりレベルの高い安全・安心なまちづくりが求められている状況にありました。

こうした中、「事故やケガは偶然の結果ではなく、原因を分析することで予防することができる」との理念のもと、科学的なデータに基づくプログラムと、市民の皆様や様々な組織・団体が行政と連携して共助によるまちづくりを行うセーフコミュニティの手法を取り入れることで、課題の解決につなげることができないかと考えました。

平成24年のセーフコミュニティの取り組み宣言から秩父市の課題を解決するための7つの対策委員会を立ち上げ取り組みを実施し、少しずつですが数字的な成果も出てまいりました。

当市にとってセーフコミュニティの手法は、安全・安心なまちづくりのための最も有効な手法であるとともに、重要な役割を担っています。

2. セーフコミュニティと3つのコンセプト「つながる」「はぐくむ」「とどける」について

秩父宮記念市民会館は、市民の文化的向上と福祉の増進を図り、そして、市民をはじめ多くの方に愛され親しまれる施設を目指し、2017年3月26日、開館の日を迎えました。

市民会館の3つの基本コンセプトである「つながる」、「はぐくむ」、「とどける」は、様々な人との交流を通じて、新たな芸術や文化を創造し、秩父から発信していくという意味があります。

この3つのキーワードは、セーフコミュニティにおける安全文化創造の原理と結びついています。安全に関する活動を行っているすべての関係者がセーフコミュニティの名のもとに「つながる」、また、セーフコミュニティの取り組みを推進し、安全・安心な心を「はぐくむ」、そして事故やケガの予防活動を「とどける」、これらのキーワードは、まさに安全・安心なまちへと結びつくものです。

今回開催するフォーラムは、秩父宮記念市民会館の開館記念とあわせて、この3つのキーワードからセーフコミュニティの活動を見つめ直し、将来にわたり市民の皆様の安全・安心を実現するために、セーフコミュニティを発展させていくことを祈念し、また誓うことを趣旨とした大会にしていきたいと考えています。

3. これからのまちづくりについて

秩父市セーフコミュニティは、2015年11月に国際認証を取得しました。このことは、秩父市が行っているセーフコミュニティの取り組みが世界基準で認められたということですが、取得することが目的ではなく、より一層の安全・安心なまちづくりを推進していくことが求められています。

セーフコミュニティ活動をより一層協力に推進していくためには、

- ①「従来から行っている安全対策とセーフコミュニティの取り組みの違いを目に見える形で示していくこと」
- ②「取り組み結果を検証し、検証結果に基づく新たな取り組みを研究していくこと」
- ③「活動状況や成果を市民の皆様へ周知し、市民の皆様とともに高い意識で取り組みを実施していくこと」であると考えています。

このことは、先日行われましたセーフコミュニティ国際会議セルビア大会でも、私が世界大会の場で主張してきたところです。

そして、今後当市は、将来推計人口から試算すると、少子高齢化が激しくなり働く世代の人口が減少してまいります。そのため、安全な地域社会を維持することが難しくなることが懸念され、「共助」によるまちづくりが重要となってきます。当市におけるセーフコミュニティの取り組みは、まさに共に助けあう「共助のまちづくり」として、これからのまちづくりに求められ、皆様とともに地域に根付いた継続的な活動へと定着していくことが求められています。

メモ欄

【プロフィール】久喜邦康

日本医科大学大学院卒業。医学博士。昭和63年に秩父市にて久喜医院を開業。

平成18年に秩父市議会議員をへて、平成21年5月から市長を務める。就任以来『一步一步 前へ前へ 確実に』市政進展に努め、秩父地域1市4町で推進する「ちちぶ定住自立圏」により、水道の広域化や医療・福祉の充実、おもてなし観光などで大きな成果をあげる。

新市役所庁舎、新市民会館の建設、広域事業として新火葬場の建設など、50年、100年を見据えた大事業を実施した。

「豊かなまち環境文化都市ちちぶ」を将来都市像として、日本一しあわせなまちづくりに奔走する。

秩父市では、2014年から実践型地域雇用創造事業に取り組んでいる。



日本におけるセーフコミュニティ活動と 秩父市への期待

白石 陽子

(一社) 日本セーフコミュニティ推進機構代表理事
立命館大学 衣笠総合研究機構 研究員

1. 日本におけるセーフコミュニティのあゆみ

日本では、2006年に京都府亀岡市がセーフコミュニティ（SC）を公式に導入して以来、SCに取り組む自治体（その一区域を含む）が増えています。2017年10月現在、16自治体及びその一部の地域（以下、「コミュニティ」）がSCに取り組んでおり、そのうち秩父市を含む14のコミュニティがSCとして認証されています。

日本は、従来から安全に関する地域の活動が活発であり、その結果、世界でも有数の安全な国として評価を受けています。そのようななかで、2005年ごろ、私どもがSCを紹介した際にはSCの意義を理解いただけないことも珍しくありませんでした。「すでにいろんな安全活動が地域で行われている」「地域の防犯パトロールが活発だ」「行政は、学校などのアスベスト対策は全て済んでいる」などの理由から新たにSCを導入する必要はないというコメントをいただくことも多くありました。しかし、SCは、既存の取組みと対峙するものではありません。むしろ、日本のようにしっかりと地域の活動が機能しているところこそ、SCを導入することによってより効果的・効率的に地域課題を解決できるようになる、いわば「ツール（道具）」なのです。

地域の活動は、時として「今までずっとやっていたから」という理由で続けられていたり、地域の実情を必ずしも反映させているとは限らないにもかかわらず、メディアに影響されて取り組んでいるものもあります。急速に地域の状況が変わるこんにち、その変化に対応することなく活動を続けていても、地域の安全は高くなりませんし、場合によって維持すらも難しくなります。

近年では、地域課題の多様化、多層化によって、地方行政や地域の担う役割が大きくなっています。その一方で、行政も自治会・町内会などの地域組織も人手不足・資金不足などの課題を抱えており、様々な面で負荷は拡大し、限界を感じておられます。そのようななか、限られた条件のもと、重点的に取り組むべき問題点を把握・共有し、分野や組織を超えて協働で取り組む仕組みを構築することは、SCだけにとどまらず、まちづくりのあらゆる面にも活用できると信じています。

そのようななか、SCを安全だけでなく、地域の諸課題の解決能力の向上つまり「地域力」の向上のツールとして着目されたのが、現在SCに取り組む16コミュニティです。ある自治体のSCご担当者が、視察にこられた方に「どうして、日本では16コミュニティしか取り組んでいないのですか」と聞かれたそうです。その質問に対し、そのSCご担当者は、「なぜなら、（行政が主導的な立場にある日本では）SCがなくても『行政』は回っているからです。そのなかで、SCに取り組むコミュニティは、行政や地域が将来の「まち」のあり方を考えたとき、これからは地域が一緒になって問題を解決する仕組みが必要だと判断したのです。」と答えたと聞いています。日本においては、SCは、「認証」だけが目的ではなく「まちづくりのツール」であると理解いた

だいていることはとてもうれしく感じています。日本に SC が導入されてから 10 年間で取組むコミュニティが 16 までに増えたのは、これらのコミュニティがしっかりと SC を理解し、取組みを積み上げてこられたからにほかなりません。

2. 秩父市の取組への期待

秩父市は、2015 年に日本で 11 番目の SC として認証されました。秩父市には、大きな特徴があります。まず、地域の活動が従来からとても活発な点です。加えて、地域のきずなが強いことも特徴的です。日本の多くの地域では、地域の絆の希薄化が問題となっているなか、秩父市の自治会への加入率は非常に高い状況にあります。また、市民の皆さんの秩父への思いも深く感じています。これらは、市民のみなさんの「秩父市は私たちのまち」という意識、つまり「オーナーシップ(当事者という意識・責任感)」が強いことを示しています。これは、まちづくりにおいては、大都市部では得られないメリットです。この「オーナーシップ」は、まちづくりにおいて力強いエンジンとなります。

従来から様々な安全やまちづくりに関する取組みが進められているという基盤があり、強いオーナーシップがエンジンとなって SC というツールを使いこなせれば、変化の大きいこんにち、様々な問題を地域で乗り越えられる力（地域力）を大きく伸ばせると信じています。実際、秩父市においては、SC の重点課題としている分野において成果が見られるようになっており、心強く感じています。

これからも引き続き、より安全・安心な、住みよい秩父市に向けて SC を最大限活用いただき、全国、世界に秩父モデルを発信していただきたいと願っています。

メモ欄

【プロフィール】 白石陽子

アジア地域セーフコミュニティ支援センター連合事務局長。セーフコミュニティ公認認証審査員。韓国亜州（アジョー）大学医学部客員教授。

立命館大学大学院政策科学研究科博士課程在学中に「セーフコミュニティ（SC）」に出会い、研究プロジェクトチームの一員として SC 発祥の地であるスウェーデンのカロリンスカ研究所（医科大学）に派遣される。帰国後は、日本の地方自治体が SC に取り組む意義と限界をテーマに研究を進め、博士号を授与される。

2011 年には、これまでの SC 活動に関する研究及び支援の実績が認められ、セーフコミュニティ支援センターとなる「一般社団法人 セーフコミュニティ推進機構」を立ち上げ、同年 12 月には、学校版 SC ともいわれる「インターナショナルセーフスクール（ISS）」の支援・認証センターとしても認証される。

2017 年 11 月現在、国内で SC に取り組む 16 自治体と ISS に取り組む 30 の保育所・小学校・中学校・高等学校を支援しながら、SC 及び ISS の研究を続け、国外については、国際セーフコミュニティネットワークの理事として、また公認認証審査員として、SC 及び ISS 活動の支援及び認証審査を行っている。

セーフコミュニティで『つながる』『はぐくむ』『とどける』安全・安心



石附 弘（モデレーター）

日本市民安全学会会長

1. 素晴らしい3つのキーワード 『つながる』『はぐくむ』『とどける』
 - ・芸術文化創造拠点：「芸術・（安全・安心）文化・交流・創造・発信の『場』」
 - ・『つながる』『はぐくむ』『とどける』の3点セットがなければ、安全・安心・健康なし
2. セーフコミュニティ（SC）活動においても重要なキーワード
 - ・秩父市：H27年11月、WHO（世界保健機関）推奨のSC国際認証を取得＝安全・安心に「ずっと住み続けたいまち」への礎づくり
 - ・議員提出による初の「セーフコミュニティに関する条例」が可決
 - ①SCとは、すべての安全関係者が、『つながる』仕組み：組織横断的取組み・協働、人と人（官官、官民、民官、民民等）、内外のSC動向の学び合い
 - ②SCとは、コミュニティのこころ（絆）を『はぐくむ』仕組み
 - ・安全意識の向上心をはぐくむ、・データへの関心、科学の眼をはぐくむ
 - ③SCとは、地域が主体となって安全・安心を、地域全体に『とどける』仕組み
秩父市の茶トレ、災害安全の広がり深化（逃げ地図、自主防災リーダー養成）
3. 不思議 『つながる』『はぐくむ』『とどける』考
 - (1) 主語も目的も書いてない
 - ・WHO（誰が）、WHOM（誰と）、WHAT（何のために）
 - ・同じ構造：「ともに学び、ともに考え、ともに行動する」日本市民安全学会のモットー
市民生活の安全・安心問題は、これに関係するすべての関係者が「市民が主役の安全・安心 まちづくり」のため、「共に考え 共に学び共に行動する」市民安全学を目指す
 - (2) 『つながる』『はぐくむ』『とどける』・・・普遍的成長エネルギー創造（運動力学現象）
 - ・安全・安心を脅かす危険や不安の環境変化があっても、『つながり方』『はぐくみ方』『とどけ方』を工夫し、地域特性に即した「具体的・実践的安全・安心のまちづくりの創造」が可能。地域社会（人間）開発プログラムのツールとして有効かつ普遍的原理
4. 現場の『気づき』から、『つながる』『はぐくむ』『とどける』を運動に！（モデル例）
 - ・「森は海の恋人」運動：気仙沼の牡蠣養殖の漁師、畠山重篤氏
気仙沼の青い海が赤く濁り始めた時、その原因が海から20キロも離れた室根山の森の荒廃にあるといち早く気づき、川が運んでくれる 森の栄養が海の幸を育てる として「牡蠣の森を慕う会」を創設、平成元年、植林運動を始め気仙沼に注ぐ川の上流に木を植える運動を展開、森と海をつなぐ運動を展開。海はしだいに青さを取り戻し、フランスのカキ業者が「ここはカキにとって天国のような海ですね」と絶賛したという。
 - ・それから暫くして、3.11 大津波 が気仙沼を襲い、畠山さんのカキは全滅。・・・・その後、どうなったのでしょうか？

- ・室根山室根神社の大祭：気仙沼の海の民が、夜明け前の海で海水を汲み、室根神社に運び、その御神水で御神体を浄め、そこから祭りが始まるという。
- ・森林には3つある：「1つは山の森、2つは海の植物プランクトンや海藻の森、3つめは、『流域に住む人の心のなかの森』」（国連表彰の際の畠山スピーチ）
- ・科学的根拠ある運動：この背景には、畠山重篤氏の科学的な分析、世界調査等、エビデンスに基づいた研究があった。

5. 要注意：事件（犯罪）や事故のリスクファクターの結合・悪化エネルギーに！

(1) 『つながる』と困るもの・・・ネット有害情報　オレオレ詐欺　投資詐欺　暴力団

➡ 切断、分断、断絶、解体

(2) 『はぐくまない方がいいもの』・・・・・・非行の芽　いじめの芽　自殺の芽

➡ 根絶、剔抉、芽を摘む

(3) 『とどけて欲しくないもの』・・・・ワンクリック請求書　税金納付書？　訃報

➡ 受け取り拒否、差し止め、拒絶

＊小事は大事：早期に手を打つことで被害の最少化：『地域の中の気づき』＝SCの秀逸性
組織犯罪インフラ・温床　暴力団対策の基本：入るを制し出るを図る（人・金）
徴税の原則・・・・・・：入るを図り出るを制す

処方箋を間違えると大変です！

メモ欄

【プロフィール】石附 弘

■職歴等：1969年に警察庁入庁後、内閣官房長官（後藤田、小渕両長官）秘書官、警察庁暴力団対策課長（初代）、長崎県警察本部長、防衛庁審議官（防衛交流）等を歴任後、2015.6まで（公財）国際交通安全学会専務理事として14年勤務。

■現在：日本市民安全学会会長、厚木市および豊島区セーフコミュニティ専門委員、警察政策学会市民生活と地域の安全創造研究部会長等。

■SCとの関わり：2003年からWHO推奨セーフコミュニティの調査研究に取組み、2008年厚木市専門委員として市のセーフコミュニティ認証取得を指導、2010年11月国際認証取得（国内3番）および国際会議、また、豊島区の認証取得活動（2012.11国内5番）に参画する傍ら、広くセーフコミュニティ運動の啓発・普及を推進中。